

## 5. 食育の実践事例

～養護教諭の視点から～

養護教諭 渡辺 誠代

幼稚園教育要領「健康」の領域に新たに食育が加わった。平成20年10月に出された解説によると、「内容（5）先生や友達と食べることを楽しむ 内容の取扱い（4）健康な心と体を育てるためには食育を通じた望ましい食習慣の形成が大切であることを踏まえ、幼児の食生活の実情に配慮し、和やかな雰囲気の中で教師や他の幼児と食べる喜びや楽しさを味わったり、様々な食べ物への興味や関心をもつたりするなどし、進んで食べようとする気持ちが育つようにすること」とある。これまでの食育の取り組みを見直し、カリキュラムの編成に向けて検討する。

### 1. 5歳児（7月） 夏野菜の栽培と会食

#### （1）この事例を選んだ理由

日頃、昼食は弁当なので、それぞれが食べやすい物を持参している。中には食べず嫌いがある幼児もいる。この事例の1週間前の弁当時間に年長組の幼児らに「なすやピーマンは好き？」と聞いてみたところ、A児は「なす嫌い」とはっきり言っていた。しかし、プランターで栽培していたなすには関心があり、朝の収穫の時には走り寄ってきて「これ食べるん？」と聞いていた。事例では、嫌いだと思っていたなすを食べることができ、食育を通じて進んで食べてみようとする気持ちを持つことができた。みんなで食べる機会を持つことで経験が広がった事例である。

#### （2）事例

事例1 「おいしいし」

7月16日（木）

年長組で育てていたなすやピーマンを収穫し、調理して食べることになった。調理は担任が行い、幼児らは匂いをかいだり、音を聞いたりしながら見ていた。「おなかすいたなあ」「早く食べたいなあ」という声があちこちから聞かれ、いよいよみんなで会食することになった。事前に「なす嫌いや」と言っていたA児のテーブルを見に行くと、A児は勢いよくなすとピーマンの炒め物を食べていた。

養護教諭 「あれ、A児くん。なす嫌いって言ってなかった？」

A児 「そうや」

養護教諭 「でも、食べられたの？」

A児 「うん。食べたよ」

養護教諭 「どうして？」

A児 「おいしいし」

養護教諭 「へえ。おいしかったんだ」

A児 「そうや。おかわりする」

A児はぺろりとたいらげ、おかわりが欲しいと手を挙げた。



翌日、A児の母が「昨日の炒め物おいしかったみたいです。家で作ってというので、どうやって作るかA児に聞いたんですけど、味付けがわからないみたいで。お砂糖も使いました？」と尋ねて来られた。母に味付けの仕方を話すと「じゃあ、家でも作ってみますね」と笑顔で答えた。

### (3) 考 察

#### ①この事例からわかる学び

##### ・自分達で育てたものを食べる

野菜は保育室からすぐに見えるプランターを利用して栽培した。家庭では購入して簡単に口にできるものが、手間をかけることで徐々に育ち、やがて実がなると、とても貴重なものとして幼児らはよく見ていた。食べ物としてだけでなく、命あるものとして関心を持ち、愛着を感じている姿が見られた。A児は自然物への関心が高い幼児で、なすの収穫の時にも「これを食べるのか」とじっと見ていた。このなすは「嫌いなもの」から「興味のあるもの」に変化していたと思われる。



##### ・みんなで一緒に食べる楽しさ

いつも一緒に弁当を食べているグループの友達とテーブルを囲み、同じものを食べる経験は、安心感や楽しさが感じられ、〇〇ちゃんの食べているもの、僕も食べてみようかなという気持ちを抱かせる。A児がおかわりをしたり、母に家で作ってほしいと頼んだりしたのは、みんなで食べたことが楽しい経験となった証と思われる。

#### ②環境の構成と教師の援助

##### ・食べてみたくなる雰囲気作り

食材や作り方の説明を丁寧にし、担任が調理の場面を見せることで関心を高めた。五感に働きかける声かけをし、待ち遠しく、お腹がすくような状況を作った。また、テーブルに花を飾ったり、2クラス合同でレストランのような配置にテーブルをセッティングしたりして、非日常的な場を演出した。



##### ・食べられたことへの評価

おいしいからもっと食べたいという気持ちが持てるよう、食べられたことに対して嬉しい驚きの気持ちを伝え評価した。A児は誇らしげにおかわりをし、できなかつたことができるようになったという自信にもなったと思われる。

### (4) 今後に向けて

食べる楽しさや自信につながる経験を広げていきたい。幼児らの関心に沿って、食べ物も自然物であることを伝えたり、そのおいしさを五感で感じたりできるような援助をしていく。また、家庭に発信しその後の食生活につながるようにしていく。

## 2. 5歳児 さつま芋の活動

さつま芋を教材として、1年を通して一連の活動を行った。畑作り、苗植え、草取り、収穫、茎の筋取り、茎の佃煮試食、焼き芋屋さん、芋菓子作りとお茶会である。



### (1) この事例を選んだ理由

さつま芋の収穫とともに採れるさつま芋の茎は、日頃あまり口にすることはないが、食べ物を無駄にせず食べることの大切さを知ることにつながる。また、食材に直接触ることは、子ども達の食への関心を高める。そこで、遊びの時間に筋取りの場を設定し、興味をもって来た幼児らとともに作業を行った。普段関わりの薄い幼児らも、食育に関する作業を通じて、楽しく会話しながら過ごすことができた。B児はあまり積極的に行動する幼児ではないが、手作業を工夫したり、手間をかけたものへの愛着を表したりする姿が見られた事例である。

### (2) 事例

事例2 「ゆっくり取るといいよ」

9月30日(水)

前日に年長組で探ってきたさつま芋の茎を佃煮にして食べることにした。その下ごしらえとして、遊びの時間に筋を探る場所を設定したところ、何人もの幼児が興味をもってやってきた。B児もじっと見ていたので、声をかけるとすぐにやってきた。

養護教諭 「葉を取って、この辺りからすーっと筋を取るんだよ。」

B児 「こう？」

養護教諭 「そうだよ。」

B児は、C児、D児、E児らと同じテーブルを囲んで、筋取りを続けた。C児ら女児は、はしゃぎながら、こんなにたくさんあるから夜までかかるなど、笑いながら作業をしていた。その横でB児は黙々と手を動かしていた。

E児 「あ、ちぎれちゃった」

養護教諭 「うん？大丈夫だよ。でも、なかなか筋を長く取るのは難しいねえ。」

B児 「ゆっくり取るといいよ。ゆーっくり。」

と言って筋を長く取ってみんなに見せた。

E児 「はーん。そうか。」

養護教諭 「ゆっくり取ると長く筋が取れるっていうこと？」

B児 「そうだよ。ゆーっくり。ほらね。」

D児 「ゆーっくり。」

E児 「ゆーっくり。」



C児 「ねえ、ゆっくり取るといいよ。」

C児は隣のテーブルで同じように作業していたF児らに伝えた。B児は嬉しそうに筋取りを続けた。次第に筋が取れた茎がバット一杯になった。

翌日、佃煮にして弁当時間に配った。食べ終わった頃B児に声をかけると「おいしかった。世界一おいしかったよ」と笑顔で答えた。

### (3) 考 察

#### ①この事例からわかる学び

##### ・自分達で育てたものを大切に思う気持ち

さつま芋は5歳児が植えて育てたものである。芋の茎もその収穫の時にみんなで集めた。見た目は食べ物とは思えないような物だが、それが食べ物に変わるという不思議さを感じられたのではないだろうか。「みんなで育てて食べるもの」という意識からか、雑に扱うのではなく、大事にきれいに作業をする姿が見られた。

##### ・製作などの経験を活かす

手先を使う活動はこれまで何度も経験してきた。紙をちぎったり、ガムテープを切ったりする経験は、生活の様々な場面に活かされている。筋取りはしたことがない幼児ばかりだったが、これまでの経験を活かしながら、どのようにしたらうまく筋が取れるか聞き合っていた。

#### ②環境の構成と教師の援助

##### ・目につく場所での場の設定

テラスにテーブルを2台出して場を設定した。5歳児が着替えて靴箱に立ち寄る際に目につく場所に設定したことで「何してるの?」「昨日の茎?」など関心を持つ幼児がたくさんいた。出入り自由なので多くの幼児が気軽に経験できた。B児もそんな場なのであまり気負わず参加できたのではないだろうか。

##### ・教師や友達と一緒にする作業

教師は通りかかった幼児に「一緒にやってみない?」と声をかけて誘い、楽しそうな雰囲気が伝わるよう配慮した。一緒に手を動かすることで、B児は普段あまり関わり合わない女児とも会話が生まれたのではないだろうか。バットはみんなで一つの物を用意し、力を合わせて一杯にするという見通しが自然に持てたと思う。

### (4) 今後に向けて

自分が手間をかけたものは、一層おいしいと思えることがわかったので、今後も幼児らが食べ物に触れたり作る楽しさを味わえたりするような機会を増やしたい。

### 3. 4歳児（11月） 母親サークル参画による味噌汁昼食

#### （1）この事例を選んだ理由

食育は、園と家庭との連携が欠かせない。母親からの希望で今年度立ち上がった食育サークルの活動から、食のマナーの点で見直しが必要な意見を得ることが出来た事例である。

#### （2）事例

事例3 「こんなことを言っては何ですが・・・」

11月25日（水）

弁当時間に味噌汁を年中組みんなで一緒に食べることになった。食育サークルの母親数名に調理してもらい、一緒に食べてもらった。たくさんの幼児がおかわりをして、温かい味噌汁を楽しく味わった。片付けが終わったところで、園長室にて今日の様子を母親達に聞くことにした。

養護教諭 「今日、何か困ったことなどはありませんでしたか？」

母1 「特に私達が困ったことはなかったですよ」

母2 「食べる子は本当にたくさん食べていましたね」

母3 「でも・・・」

養護教諭 「何でしょう」

母3 「こんなことを言っては何ですが・・・」

養護教諭 「何でも教えて下さい」

母3 「思ったよりも、お行儀が悪いんですねえ」

養護教諭 「例えば・・・？」

母3 「口に食べ物を入れたままおしゃべりしたり」

母1 「左手が出ていない子もいたね」

母2 「お箸を握って持っている子もいましたよ」

母3 「うちの幼稚園の子はもっと、お行儀がいいのかと思っていましたが・・・。でもこれも家庭のしつけの問題ですね」

養護教諭 「おうちでは気をつけていても、幼稚園だとはしゃいでしまう子もいると思うが」

母3 「あー、そういうこともあるんですねえ・・・」

養護教諭 「これまで、食べている途中に立ち歩く子もいて、それは気をつけて、食べ終えるまで座っているようになってきたんですが、他のことももう少し気をつけたらいいですね」

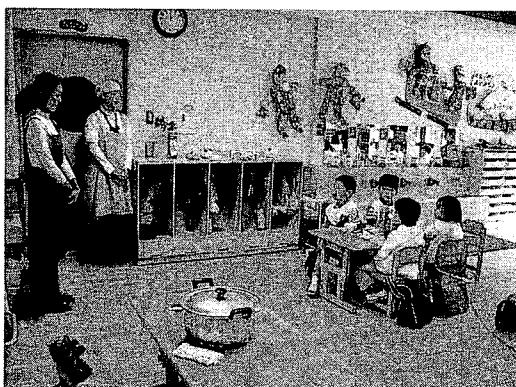


### (3) 考 察

これまでの食育における家庭との連携は、園での活動や指導を発信し、感想をもらったり、園で調理した物を幼児らが母親と一緒に作って弁当に持ってきたりというものであった。今回は、企画の段階から母親サークルのメンバーと相談し、母親の願いのこもった活動になった。参画の形をとったことで、子ども達が集団で食べる様子を客観的に見てもらうことができた。楽しくおいしく食べるというねらいは充分達成されたが、食のマナーについては課題もあることがわかった。

この日は特別な弁当時間だったとはいえ、食べ方や姿勢は日頃の生活習慣によるもので、母親達が感じる食のマナーに温度差があることもわかった。食育サークルに集った母親らとそうでない母親とでは、子どもの食のマナーへの意識が違うことが想像できる。楽しく食べることとマナーを守って気持ちよく会食することは、相反することではなく同じである。

この意見を受けて、12月の保護者懇談会では、味噌汁昼食の様子を報告し、食べるマナーについても伝えた。今後も家庭との連携を大切に、個々への指導もしていきたい。



#### 4. 5歳児 手作り昼食（2月）

5歳児は3学期の表現会の後、手作り昼食に取り組んでいる。食材に触れることや友達と一緒に楽しむことなどを目的として、下ごしらえとおにぎり作りをしている。

##### （1）この事例を選んだ理由

クッキングは、子ども達にとって魅力的な活動であるが、目的を何におくかによって、時期と内容が異なる。5歳児の3学期は、これまでの経験から、五感を通して食材の特徴を知り、かかわることができる。また、表現会で学んだみんなで力を合わせる心地よさを活かして、4年前から行っているこの食育活動は、修了前の楽しい経験になっている。

##### （2）事例

事例4-1 「なんだか酸っぱい匂いがするねえ」

2月17日（火）

当日の朝は、以下のように6グループで仕事を分担して、下ごしらえをした。

- ア 米砥ぎ（ざるに米を各自2合ずつ入れ、片手で砥ぐ）
- イ にぼしちぎり（にぼしの頭を取り、半分に割ってお茶パックに入れる）
- ウ 海苔切り（おにぎり用の海苔をはさみで切り、アルミホイルで包む）
- エ 白菜ちぎり（味噌汁用の白菜を手でちぎる）
- オ キャベツちぎり（野菜炒め用のキャベツを手でちぎる）
- カ エリンギちぎり（野菜炒め用のエリンギを手でちぎる）

G児は、お母さん先生と一緒にエリンギをちぎる  
グループだった。

- G児 「これがエリンギ？」
  - お母さん先生 「そうよ。やってみよう」
  - G児 「おもしろい形」
  - H児 「こうやつたらちぎれるよ」
- H児はエリンギのじくを縦に裂いた。  
他の幼児らもそれぞれエリンギをちぎり始めた。
- I児 「なかなかちぎれん」

エリンギは縦には裂きやすいが、横にはちぎりにくいようだった。

- G児 「爪を立てたらちぎれるよ」
- I児 「そうやね」
- J児 「力入れすぎたらダメだよ」
- H児 「もっと小さくしたらいいんじゃない」
- お母さん先生 「そうね。もうちょっと小さくしようよ」
- G児 「なんだか酸っぱい匂いがするねえ」

幼児らは、口々に「本当や」「酸っぱい匂いや」「だんだんできてきた」などといいながら、エリンギを細かくちぎり終えた。



事例 4-2 「他のグループがいたからいろんなものを食べられた」 2月 17 日 (火)

手作り昼食を終え、お母さん先生と一緒に今日の活動を振り返った。

担任教師 「今日の手作り昼食どうでしたか？何か思ったことお話できる？」

幼児らは何人もが元気に手を挙げた

K児 「一人で作るより、みんなで作ったらおいしくって思いました」

担任教師 「そうだね。おいしかったね」

L児 「他のグループがいたから、いろんなものを食べられた」

担任教師 「どういうこと？」

L児 「僕らはお米を研いで、J児ちゃん達はエリンギをちぎって、他の人が野菜をちぎったから、みんなでしたし、いろんなものが食べれた」



担任教師 「そうだね。それぞれのお仕事を一生懸命したものね」

M児 「なんか、みんなで力を合わせたし、おいしかったよ」

N児 「いつもあんまり食べない豆も、今日食べれてうれしかった」

O児 「みんなで食べたし、食べたんじゃない？」

事例 4-3 P児の2日後の連絡帳より

『手作り昼食お疲れさまでした。楽しい体験ができたようで、今日の夕飯に（P児が）みんなにおにぎりを作ってくれました。「おいしくなあれ！」と塩をふったり、作ったおにぎりは本当においしかったです。また自分で作ったおにぎりの味は格別で、いつもの2倍の量を食べていました。明日の朝も作ると意気込んでおりました。』

担任は、P児の前でこの連絡帳を養護教諭に見せた。P児ははにかんだ嬉しそうな顔で笑った。

(3) 考 察

①この事例からわかる学び

- ・五感をはたらかせる

事例 4-1 にあるように、幼児らはまず、食材の形状に目をつけた。食べ物そのものをじっくり見ることは日ごろあまりないことであろう。エリンギはユニークな形をしており、関心が高かった。次に触って、その感触や裂いた感覚を手で感じている。細かくちぎるという仕事をするうちに、相談し合ってエリンギを傷めないように力を加減していた。作業が徐々に進むと、



匂いを感じるようになった。これまでの経験を活かし、「なんだか酸っぱい匂い」と表現している。きのこ類のもつ独特の匂いを感じられたのは、実際に手で触れてちぎったからこそである。食べる時にも、野菜いための中の細かなエリンギを探しては味わっていた。エリンギと同様に野菜類も手でちぎることで五感が敏感にはたらき、食材への関心が高まり、食べる意欲や楽しさにつながったと思われる。

#### ・みんなで力を合わせる実感

活動を通して、終始和やかでクラスの一体感が感じられた。事例4-2にあるように振り返りを聞くと「みんな」という言葉が何度も出てきた。この言葉は、2月の表現会の劇や合奏に取り組んだ頃からよく聞かれた。みんなで力を合わせて成功させた、という実感がこの活動にも自然につながっていたと思う。5歳児のこの時期だから感じる思いである。今まで苦手と思っていたものを食べられたという副次的な効果も見られた。

#### ・学んだことを家庭で再現する

事例4-3は、母親からの連絡である。手作り昼食での楽しい経験をそれで終わらせるのではなく、家庭でも再現している幼児がいる。おにぎりに塩をふる時に「おいしくなるために『おいしくなあれ』っておまじないをするんだよ」と伝えたことを覚えていたのである。このおまじないには二つの効果があり、一つまみの量を感じて塩を加減し、たのしくおにぎりを作ることができる。それをみんなですることが、園ならではの食育であると思う。家庭でP児がみんなに作ってあげて、それを母親が認め、園にも知らせてくれ、また園でもP児の姿を喜び合うという連携の循環が見られた。家庭への発信が幼児の自信や喜びにつながっている。



## ②環境の構成と教師の援助

#### ・食材の吟味と提示

これまでの取り組みから、どの食材を利用するかを毎年吟味してきた。幼児らが手でちぎることができる食材、興味を持てそうなものや苦味の少ないものを選んだ。

下ごしらえをする前に、全ての食材を全員に提示し特徴などを説明した。中には白菜とキャベツの区別ができていない幼児もあり、実際に見て触れる機会につなげることで違いを知ることができた。エリンギは、馴染みの薄い幼児が多く仕事分担を発表した時には「それって何?」という反応の幼児もいた。「エリンギをちぎるのが一番難しいかもしれないよ」と期待感を持たせ、形やちぎり方などを紹介し五感を働かせることを意識させた。

#### ・分担表の掲示

担任が2月の予定表に手作り昼食も書き入れ、楽しみに待てるように工夫していた。また、前日から役割分担表を掲示して、それぞれの仕事を説明しておいたため、みんなで力を合わせることを理解して取り組めたと思う。

2月	3	4	5	6	7
1 日曜日	2	3	4	5	6
8 9 リハーサル	10 11 ひようげんか い	12	13 14		
15 16 ラーメン	17 18 はし	19	20 21		
22 23 24	25	26	27 28		

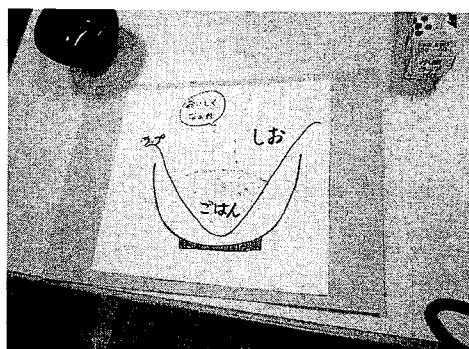
右側には、おでこ、おこり、おへそ、お尻などの部位を示す図と、おでこ、おこり、おへそ、お尻の文字が記載されています。

#### ・家庭との連携

前月の学年懇談会で、趣旨と内容を説明した。エプロンや三角巾の準備を家庭でも自分で身につけられるように協力をお願いした。当日は、家でエプロンの紐を結ぶ練習をしてきたたり、三角巾の後ろに手製のゴムをつけて自分で扱えるように準備してくれた保護者も多くいた。また、ボランティアとして3名の母親に下ごしらえと調理を手伝ってもらい、幼児らの様子を見てもらった。わが子以外の幼児の姿からも母親が学ぶこと也有ったようだ。

#### (4) 今後に向けて

来年度も今年度の経験を活かし、幼児らの実態に合った食育を計画し、実践していくたい。



## <1年をふりかえって>

### 1. 幼児の学びについて

#### (1) 食べることを楽しむ

幼児らは食に関する活動をすると笑顔を見せ、「もっと食べたい」「おいしかった」と言う。(事例1. 2. 4) 食育を計画している日は、朝から「今日、エプロン持ってきたよ」と言いに来たり「いつやるの?」と催促したりする幼児もいる。楽しいから関心を持つのであり、食べてみようという意欲になる。将来の食生活にも楽しさが影響することがわかっている。(本園研究紀要第53号) 幼児期の食育は、食べることを楽しいと感じることが最も重要である。食育の目的を楽しさ中心とし、知識や手技の獲得よりも、「楽しさ」の感情体験を優先してきたことが、幼児らの学びとなっている。

#### (2) 食に関心を持つ

自分達で栽培したり収穫したりすることで、食べ物のはじめの姿を知り、成長に驚き、関心を高めていくことがわかった。(事例1. 2) 栽培活動は主に5歳児が行っているが、その様子は3歳児や4歳児も見ており、5歳になったら自分達もできるという期待感を持っている。

食材への関心として、その特徴を知ることも有効である。(事例4) 形や匂い、味など五感をはたらかせてじっくりかかわることを保障すると、食材に対する知的好奇心が高まると思われる。

調理への関心として、親しみのある教師や母親(お母さん先生)が調理をすることで、関心を高められることがわかった。(事例1. 4) 一緒に調理したり、その場面を見ることが有効なので、家庭にも発信し、お手伝いの重要性を知らせる意義がある。

### 2. 環境の構成と教師の援助について

#### (1) 環境の構成

##### ・非日常の演出をする

楽しい雰囲気を醸し出すために、調理場面を見せたり、レストランのようにテーブルをセッティングしたりすることで幼児らは生き生きと準備をし「お腹がすいた」と食べる意欲を高めていた。(事例1) 給食のない幼稚園ならではの非日常の演出が有効である。

##### ・限られた環境でできることを工夫する

特別な調理施設や配膳設備がなく、畑も十分なスペースがないという限られた環境であるが、その中で母親の力を借りたり、目に見える場所にプランターを設置したりして工夫することで、幼児らの生活に自然に食育が関わることができる。

## (2) 教師の援助

### ・目的をしづらる

目的を「食に関する楽しさを経験する」こととしたので、手技の先取りをせず、ゆったりと幼児らのペースに合わせることができる。包丁を使わせることなどに目的を広げると、危険回避が優先される可能性があり、本来の楽しさから離れてしまうことが考えられる。教師も一緒に栽培や調理に関わり、一緒に食べて楽しむことが大切である。

### ・学年に応じた援助と積み上げをする

学年に応じて、食育を進めることで、年長組になったらこれができるという期待感が持てたり、僕達が作ったものを年下児にもあげよう、という気持ちが持てたりする。5歳児を中心とした食育は計画性をもって、学年に応じた積み上げが重要である。

### ・安全で安心できるための配慮をする

事例にはあげなかつたが、アレルギーや食に関して慎重な幼児への配慮は大切である。食べられないことで自信をなくしたり、楽しさが半減したりしないように、内容や量が加減できるように予め準備しておく必要がある。

## (3) 今後にむけて

これまでの実践を振り返り、食育のカリキュラムを作成する。そのために幼児らの反応を見たり、保護者の意見を聞いたりしながら、全職員で検討していきたい。健康な生活のベースとなる「食」が楽しいものとして幼児らの成長に反映するように、取り組んでいきたい。

## 食育に関するカリキュラム

＜食育の目標＞・食を通じ、健やかなこころとからだの発達を促し、子どもの「楽しく食べる力」を豊かに育む　・主体的に食に関わることで、感謝の気持ちや楽しさを味わう

期(2年保育)	食育のねらい	指導・活動内容と留意点			行事と留意点	保護者との連携
		弁当や食に関わる指導	みんなで同じものを食べる活動	芋茶会(秋)	もちつき(冬)	
3歳	I 弁当の始まりに合わせて、弁当を持参し食べることに期待感を持つ	弁当の準備を知る 教師に手伝ってもらって、手洗いやテーブル拭き、自分の荷物を扱う挨拶をして食べる				弁当の諸注意 お便りや懇談会を通じて、弁当の内容や量などの留意点を知らせ、協力を得る
	II みんなで食べることに安心感や楽しさを感じる	弁当時間の約束1 弁当を食べ終えるまで、立ち歩いたりせず、最後まで食べる	食べ物に关心をもつ ・季節の果物を題材とした絵本などを利用し、果物に关心をもつ みんなで食べる活動を楽しむ ・年長児が作った焼き芋や豆まきでまた大豆を調理してもらい食べ、食べ物に关心をもつ	芋茶会に参加し、雰囲気を味わう みんなで食べることを楽しむ	もちつきに参加し雰囲気を味わう みんなで食べることを楽しむ	茶会やもちつきに参画し、子ども達の様子を知ってもらう
4歳	III(I) 弁当の始まりに合わせて、弁当に関する約束やマナーを知る	弁当時間の約束2 グループで協力して準備し、楽しく弁当を食べる 挨拶をして感謝して食べる 自分達で片づけをする	プランターで育てた野菜を食べる 夏野菜を保育室前のプランターで育て、みんなで食べることで、食べ物に興味をもつ			弁当の諸注意 お便りや懇談会を通じて、弁当の内容や量などの留意点を知らせ、協力を得る 夏休みなどに親子で作って食べるレクレーションを実施する
	IV(II・III) みんなで食べることを楽しみ、食べられないものへも関心をもつ	弁当時間の約束3 早く食べ終えても、友達に迷惑をかけないように気をつける	よく噛んで食べる 根菜類を見たり触ったりして関心をもち、奥歯でかむことを意識して、みんなできんぴらごぼうなどを食べる	芋茶会に参加し、雰囲気を味わう お菓子の甘さやお茶の味を知る	もちつきに参加し雰囲気を味わう みんなでついたもちを楽しく食べる	・野菜への関心がもてるよう、園での活動を発信し、家庭につなぐ ・茶会やもちつきに参画し、子ども達の様子を知ってもらう ・母親に参画してもらい味噌汁昼食を実施する。母親にも子ども達の食べる様子を見てもらう
5歳	V(IV) 友達や教師と共に食べ物に触れたり、食べたりすることを楽しむ 食べ物や作ってくれた人に感謝して食べる	夏の野菜や秋にみんなで食べるための芋を育てる 野菜の特徴を知り、栽培する 食べ物と排便のつながりを知る	宿泊体験で同じものを食べる ・普段苦手なものも空腹や友達の様子に刺激され、食べてみようとする ・いわなつかみをし、魚の命に感謝して、食べる 夏野菜を収穫しレストランを作って食べる 収穫に感謝し、調理場面を見て五感を働かせ、みんなで楽しく食べる			・宿泊体験での食事に関して、アレルギー等の確認をし適切な配慮をする ・野菜への関心がもてるよう、園での活動を発信し、夏休み中の野菜の世話を親子で体験する
	VI(V) 友達と協力して、食べ物に触れたり、調理したり楽しむ 友達や教師と一緒に、マナーを守って気持ちよく食事をする	箸の正しい持ち方を知り、持とうとする 大豆などを使って正しい箸の持ち方を意識し練習する	芋を収穫し、いもの茎の煮物や焼き芋を食べる 芋の茎の筋をとり、煮物にして食べたり、園庭で炭火で焼き芋を作り焼き芋屋さんごっこをする 手作り昼食を作つて食べる 役割を分担し、それぞれに下ごしらえをして、おにぎりを握つてみんなで食べる	芋菓子作り 皮むきや裏ごしなどを経験する 茶会 お運びや作法を経験したり、お菓子やお茶を味わったりする	もちつきに参加し、もちを丸めたり、味付けをしたりする自分たちで作ったもちを味わい楽しむ	・お菓子作りやもちつき、味噌汁昼食に参画し、子ども達の様子を見てもらう。子ども達への調理の指導を通じて、家庭での手伝いにつなげる ・年長組で行った食育のアンケート調査を行い、来年度の参考とする